



Title	世界への能動性の始原について : 意志と表象の消失点としての意欲
Author(s)	末田, 圭果
Citation	メタフシカ. 2019, 50, p. 103-115
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73770
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

世界への能動性の始原について ——意志と表象の消失点としての意欲——

末田圭果

はじめに

ショーペンハウアーは主著『意志と表象としての世界（1818）』において、世界を表象（die Vorstellung）であると同時に、意志（der Wille）だと叙述する。カントの現象と物自体に拠る世界把握を継承する彼の記述は、哲学史的に批判にさらされてきた¹。しかしこの従来のショーペンハウアー理解は、物自体として記述される意志を実体的に捉え、彼の哲学体系を二世界論として解釈することに由来する。つまり実体的意志から表象としての世界が展開されるという解釈が主流であり、その解釈に基づくショーペンハウアー批判が為されてきた。ところが近年、彼の哲学体系を表象一元論として理解し、ドイツ観念論の系譜に位置づける解釈が可能となり、哲学史的な理解が一変されている²。本稿でも近年の研究成果を踏まえ、彼の哲学体系を表象一元論として読み解くことにする。

ショーペンハウアーは世界を意志と表象として記述するにあたって、まず初めに私たちの身体を分析し、身体において開示されている世界の二重性、つまり世界が表象であると同時に意志だということを、世界のあらゆる事物つまり、動物、植物、鉱物、無機物へと敷衍していく（Vgl. WI, 151ff.）。しかしここで問題になるのが、意志が身体において明らかだという点だ。なぜなら本来意志は、たとえ表象一元論の立場に立ったとしても、やはり私たちの認識には上らないはずだからだ。従って本稿では、表象一元論を維持しつつ、私たちの身体において明らかになる意志とはいかなるものかを明らかにし、一見矛盾するショーペンハウアーの記述を整合的に理解する。

そのために以下では、まず主著におけるショーペンハウアーのどのような記述に、どのような問題点があるのかを、意志という語の規定と併せて指摘する（第一節）。そして主著と、それに

¹ Vgl. Kuno Fischer, *Geschichte der neuern Philosophie—Schopenhauers Leben, Werke und Lehre—*, Bd.9, KRAUS REPRINT, 1973

² 例え ば YASUO KAMATA, *Der junge Schopenhauer—Genese des Grundgedankens der Welt als Wille und Vorstellung*, Alber, Freiburg/München, 1988 や、鎌田康男、齋藤智志、高橋陽一郎、白木悦生『ショーペンハウアー哲学の再構築』法政大学出版局、2000 年が挙げられる。

先立つ学位論文『充足根拠律の四方向に分岐した根について（1813）』（以下『根拠律』と略記）での記述を基に、ショーペンハウアー哲学において重要な概念である「意欲」（das Wollen）と性格論について、その内容を確認する（第二節）。意欲についての理解を正確にすることが、本稿の結論には欠かせないが、ショーペンハウアーは意欲を私たちの行為との関連で詳述している。そして行為についての考察には、ショーペンハウアーの性格論³が不可欠だ。従って意欲と行為の関わりを究明するために、主著と『根拠律』から性格論を素描する。次に私たちの認識、行為の制約としてのプラトンのアイデア（die Platonische Idee）について記述する（第三節）。近年の先行研究では、意志並びにプラトンのアイデアの超越論的働きが指摘されており、本稿でもその理解に則ることで、身体において知られる意志について考察する。最後に身体に開示されている意志とは、総体としての意欲であり、かつ同時に叡智の性格であることを示すことで、意志を超越論的⁴次元で把握可能であることを明らかにする（第四節）。その結果、表象一元論の立場から、ショーペンハウアーによる身体における意志の記述を整合的に理解し、更に性格論とも接続できる。

1. 問題の所在

ここではショーペンハウアーの身体における意志の把握に関する記述を追い、その問題点を明確にする。主著第一巻によると世界は遍く表象だ。そしてその限りににおいて、身体も一表象である。しかし第二巻では身体について以下のように述べられる。すなわち「自分の身体は他の表象とは全く別の、全然種類の異なった仕方で意識にのぼる」（W1, 155）。ではどのような仕方かという、身体は単なる表象でありながら、「同時にまったく別の仕方で、誰もが直接に知るものとして与えられており、それは意志という言葉が表している」（W1, 151）。つまり世界は表象である以上、自らの身体も表象だが、私たちの意識に対して身体は表象に尽きない何かとして直接与えられており、その何かが意志と呼ばれている。表象を私たちの認識の対象だと解すると、ここで言われていることは、自らの身体を含め世界は私たちの認識の対象にすぎないけれども、同時に自らの身体は単に認識の対象に尽きない何かとして与えられているということだ。そしてこのことは私たちが自らの身体を、他者の身体を認識するようには捉えていないという、素朴な感覚を記述しており、自らの身体を他者の身体と比較して特別たらしめているものを意志と呼んでいる。ではこの記述の何が問題なのか。意志について以下で見ていく。

ショーペンハウアー曰く「どのような種類であろうと、全ての表象、つまり全ての客観は現象である。しかしただ意志のみが物自体である」（W1, 163）。ここから、意志は単に表象に尽きな

³ ショーペンハウアーの性格論は、Arthur Schopenhauer, “Über das Fundament der Moral”, in: *Die beiden Grundprobleme der Ethik* (1840) でも展開される。著作によって性格論の叙述のされかたは異なるが、Matthias Köbler, „Die Philosophie Schopenhauers als Erfahrung des Charakters“, in: *Schopenhauer im Kontext* で整合的な解釈が示されている。

⁴ 最新の研究成果であるショーペンハウアー哲学の表象一元論的な見方は、意志概念を超越論的に理解することによっている。この点に関しては YASUO KAMATA 前掲書に詳しい。また超越論的という言葉には様々な定義があるが、高橋陽一郎によると、超越論的という語は広義に採れば、＜認識と行為を含む一切の経験に先立ってそれを制約する＞と解せる。（鎌田康男、齋藤智志、高橋陽一郎、臼木悦生『ショーペンハウアー哲学の再構築』法政大学出版局、2000年、239ページ参照）。本稿ではこの広義の意味で、超越論的を理解し話を進める。

いものとして捉えられていることが分かる⁵。更に詳細に以下のように語られる。

物自体としての意志は […]、現象のあらゆる形式から完全に自由である。意志は現象することによってはじめて、この形式に受け入れられる。従って現象の形式はただ意志の客体性に関係し、意志自身とは無関係である (W1, 166)。

意志は、それによって私たちが世界を認識している形式には全く当てはまらない。従って意志それ自体は、私たちの認識には決して上らないし、上ってはいけない。しかし意志は現象するにあたっては、この現象の形式の中で捉えられる。従って世界を表象として捉えると、「全ての表象、全ての客観は、意志の現象であり、可視性であり、意志の客体性」(W1, 163f.) である。

ではこの現象の形式とはいかなるものか。ショーペンハウアー曰く表象は時間、空間、因果性の形式によって規定されており、この形式の規定は「根拠の原理 Satz vom Grunde (充足根拠律)」と呼ばれ、認識する主観にとってはアプリアリな認識の規定だ (Vgl. W1, 34f.)。カント哲学においてと同様に、時間・空間・因果性が私たちの認識の形式であり、それは私たちの経験の条件として、主観の側に備わる形式だ。更に物自体としての意志は根拠の原理に規定されないため、意志には「端的に根拠がない」(W1, 167)。つまり意志は根拠の原理を免れている⁶ため、それ以上遡ることができる根拠を持たない、あるいは少なくともそのような根拠を私たちが認識することも、知ることもあり得ない。

さて以上のことをまとめると、表象は遍く根拠の原理によって秩序付けられており、私たちは、この根拠の原理を通じてのみ世界を認識している。世界を表象としてのみ見る場合はこの説明で事足りる。しかし私たちの身体の分析によって、世界は表象であると同時に、単なる表象に尽きないもの、つまり意志だとされた。更に意志は表象でない限りで、私たちの認識の形式である根拠の原理を免れている。ところがショーペンハウアーはこの意志が私たちの身体において直接与えられていると述べる。これは意志が根拠の原理を免れている以上、本来あり得ない。

従って意志が私たちの身体において直接与えられていると述べられるとき、これには整合的な解釈が必要であろう。その糸口を以下の記述から読み取れる。

私は私の意志を全体において、統一体として、その本質に従って完全に認識するのではない。そうではなくて、私は私の意志をその個々の働きにおいてのみ認識する。つまり時間においてのみ認識する。そして時間とは、あらゆる客観の形式であるように、私の身体の現象

⁵ もちろん「物自体」には様々な解釈が可能であり、ショーペンハウアーの物自体についても議論がある。しかしショーペンハウアーが私たちの認識の形式を全て取り去っても尚、残るものがあるとすると、それは表象とは全く種類が異なる物、つまり意志以外にはなく、それゆえ意志は本来の物自体である、と述べている (Vgl. W1, 227) ため、ここでは「単に表象に尽きないもの」とする。

⁶ 本来根拠律を免れている意志は、時間・空間の規定も受けないため、それ自身は数多性を持たない「一なる」ものとされる (Vgl. W1, 166f.)。この意志の一者性は、ショーペンハウアー哲学の倫理的側面を考察するにあたっては、大変重要だ。しかし本稿での議論とは直接的に関係しないので、ここでの指摘にとどめる。

の形式である (W1, 153)。

意志は個々の働きにおいて認識される。もちろん本来意志は認識されてはいけない。従ってここでも、個々の働きにおいて認識されている意志とは何かが問題だ。ではまず意志の働きとは何か。「意志のあらゆる真の働きとは、ただちにそして必ず身体の働きである」(W1, 151)。つまり意志の働きとは、身体の働きであり、個々の意志の働きにおいて、意志が認識されるということは、個々の身体の働きにおいて意志は認識されることになる。従って問題は、個々の身体の働きにおいて知られるものは何かという問いに収斂する。

この問いの答えに重要な示唆を与えているのが、次の指摘だ。「反省においてのみ、意欲と行為は異なる。そして実際には両者は同じものである」(W1, 152)。狭義に取れば、行為とは身体の働きだろう。従って意欲とは行為だから、身体の働きであり、意志の働きだということになる。個々の行為において知られる意志について究明するためには、行為と意欲が同じものである、とはいかなる事態であるかを考察しなければならない。またショーペンハウアー哲学において、行為は性格論とも密接に関わっている。そして意欲と行為、性格論については学位論文でも詳述されており、その立場は主著においても維持されている。それゆえ次節では『根拠律』における意欲と行為についての記述と、性格論について見ていく。

2. 意欲と性格論

本節ではショーペンハウアーが特別な表象として扱う意欲と、私たちの行為と密接に関わる性格論を見ていく。『根拠律』では、表象の種類を四つに分け、その種類毎に私たちの認識能力（感性、悟性、理性）の働きが明確にされていく。そしてその第四の類の表象として、「内官の直接的客観、つまり意志の主体 (Das Subjekt des Willens)」(Go, 68) が扱われる文脈で、「主観は意欲するもの、すなわち自発性としては認識されるが、しかし認識するものとしては認識されない」(Go, 68) と断った上で、意欲について詳細に語られる。

まず「自らが意欲の主体であるということは、内官に直接与えられている」(Go, 73)。つまり自らの意欲は、自らから発してくるということを、私たちは時間の中で意識している⁷。しかし「意欲の本質は、意欲そのものの以外のどこにも決して見られず、それゆえ他の概念に包摂することはできない」(Go, 73)。すなわち意欲は本質的には、何か他のものに依存して存在しているのではない。従って「意欲が何であるかは、知られたものとして、前提してもよいし、むしろしなければならない」(Go, 73)。意欲はそれ以上遡って何かに規定されることがないにもかかわらず、私たちは意欲と呼ばれている何かを知っているし、知っていなければならない。それゆえ「意欲は人間自身のもっとも内的な本質」(Go, 76) だ。

さてでは意欲と行為の関係について見ていく。

⁷ 感官は、内官（内的感覚器官）と外官に分かれるが、ショーペンハウアーにおいては、内官の形式が時間で、外官の形式が空間だとされる (Go, 21)。

行為は意欲ではなく、因果的（kausal）になった意欲の作用（Wirkung）である。[…] 意欲は因果的にならない限りで願望と呼ばれる。[…] 互いに対立し合っている複数の願望の中で因果的になるものは、他の願望とは対照的に、真の意欲と呼び、[…] 真の意欲に、それによって因果性が与えられる働きを決断と呼ぶ（Go, 73）。

意欲が因果的になるとは、意欲が因果律に規定されるようになることだ。それゆえ意欲という表象が、因果律に従って、他の表象に作用を及ぼすとき、それは行為と呼ばれる。従って意欲も行為も同じ表象であり、ただ両者が従う規定が異なるだけだ。そして意欲に因果律の規定へと現れさせる働きが決断である。従って意欲を認識することと、行為を認識することは同一だ。換言すると、私たちは様々な願望を持っている。願望は願望である限り、因果的な発現はせず、現れては消えていく。しかしそれら願望の内の一つが決断されると、その願望は因果律に規定されながら、他の表象へと作用する。これが行為だ。それゆえ実際には意欲と行為は同じ表象であり、反省においてのみ同じ表象に対する異なる規定が明らかになるため、意欲と行為は区別される。

さてではこの決断はどこからやって来るのか、あるいは何かに規定を受けているのか、自らが意欲の主体だという意識は何に由来するのか。「願望⁸についてはどうにか動機が説明できるが、真の意志作用である決断の動機は説明できない」（Go, 75）。つまり動機によって説明できるのは、行為に際して私たちがどうして任意の願望を持ったかだけであり、どうして任意の願望が意欲に、行為になったのかは根拠を挙げて説明し得ない。従って、決断は「何らかの全く無制約なもの」（Go, 75）か、「意欲の主体のある状態を決断の必然的な制約として前提しなければならない」（Go, 75）。

ところで私たちの行為を観察すると、「同一人物は、全く同じ状況では、全く同じ仕方で、それゆえいわば格率に従って行為する」⁹（Go, 76）。つまり私たちの行為は一定の傾向性、すなわち性格を持っている。これは換言すると、私たちの行為は、各人各様でありながら、個々の人格においては、一定の法則性を持っている。従って私たちの行為が一定の合法則性をもっている限りで、個々の行為に際して私たちの決断は全く無制約に行われているのではなくて、決断には何らかの制約があらねばならない。この制約が叡智の性格であり、個々の行為から明らかになるのが経験的性格だ。以下主著におけるショーペンハウアーの性格論を追う。

主著でも「決断は個々の意志の内的特性、つまり叡智の性格から生じた」（W1, 382）と述べられる。すなわち決断の制約として叡智の性格が考えられていることが分かる。更に詳細に以下のように述べられる。

人間も性格を持っており、その性格に基づいて動機が必然性を持って行為を引き起こす。この行動様式そのものにおいて経験的性格が明らかになるが、しかし再びこの経験的性格の

⁸ 願望についても、願望の性質や、その由来するところについて考察しなければならないが、本稿の趣旨とは少し異なるため、これ以上は論究しない。願望については、主著 55 節に詳しい。

⁹ もちろん性格の可変性はショーペンハウアーも認めているが、それについては主著 55 節「獲得された性格 (der erworbene Charakter) 参照。ここでは性格論の可否は問わない。

うちに、人間の叡智的性格、つまり意志そのものが明らかになる。(W1, 377)。

つまり、私たちの行為は性格と動機によって引き起こされる。経験の全体や、客観相互の関係が決断の動機になる (Vgl. 74)。動機によって複数の願望が生まれ、叡智的性格による制約を経て、決断によって願望の中から任意の願望が意欲になる、つまり行為が引き起こされる。そしてこの行為を通じて、経験的性格が推論されるため、叡智的性格が認識されたものが経験的性格だ。ここで叡智的性格と経験的性格の関係は、意志と現象の関係と重なる。従って、「ただ意欲そのものだけが知覚可能だが、しかし意欲に先行する状態は知覚可能ではない」(Go, 74)。つまり叡智的性格は、意志がそうであったように、私たちの認識に上ることはないし、上ってはいけない。それゆえ本来、叡智的性格に対しても根拠律は適用できず、叡智的性格を私たちの個々の行為における決断の原因として捉えることはできない。

では叡智的性格が私たちの行為の制約であるとはいかなる意味か、以下で見ていく。ショーペンハウアーは主著で、「叡智的性格はアイデアと一致する。あるいは更に本来的には、アイデアにおいて明らかになる根本的な意志作用に一致する」(W1, 219) と述べる。叡智的性格がアイデアだということと、アイデアの超越論的働きを併せて考察すると、叡智的性格が私たちの行為の制約であることが解釈可能になる。

3. プラトンのアイデアの超越論的働き

本節ではアイデアの性質について概観し、アイデアの超越論的働きを『根拠律』から明らかにする。アイデアは主に主著第三巻で主題化され、意志の否定にも関係する重要なタームだ。それにもかかわらず、哲学的には矛盾を抱える語として扱われてきた¹⁰。近年の研究では、その批判をかわし、ショーペンハウアーのアイデア論を整合的に解釈することが可能になっている¹¹。以下にプラトンのアイデアについての主著での記述を確認し、その上で先行研究を踏まえつつ、『根拠律』の叙述から、プラトンのアイデアの超越論的特徴を見ていく。

主著の第三巻曰く、「意志がその可視性において現れること、つまり意志の客観化には実に限らない段階がある」(W1, 185)。そして「無数の個体において表現される意志の客体化の様々な段階は、それら個体が到達したことの模範として、あるいは事物の永遠の形相として存在する」(W1, 186)。表象は意志の客体化であり、その客体性の程度には段階がある。そして「これら意志の客体化の諸段階はプラトンのアイデアに他ならない」(W1, 187)。更に、アイデアは「個々の事物の無限の集合を代表する」(W1, 312)。以上をまとめると、意志の客体化の諸段階とは、個体に左右されない種や類としての表象のことだ。そしてその種・類の表象とは、個々の事物の集合を代表する模範、永遠の形相としてのプラトンのアイデアである。以下にアイデアの超越論的働きを確認する。

まずショーペンハウアーは幾何学について論じる文脈で、標準直観という語を導入する。「標

¹⁰ Vgl. Kuno Fischer, a. a. O.

¹¹ Vgl. KAMATA YASUO, a. a. O.

標準直観とは、あらゆる経験の基準となり、それゆえ＜概念にもある包括性＞と＜個々の表象が例外なく有する何らかの規定性＞とを合わせ持った図形と数」(Go, 62)である。つまり標準直観は、個々の事物の特定の規定を捨象することで形成される概念が持つ普遍性と、個々の事物を個々の事物として特徴づける規定性の両面を持つ。そして単なる抽象作用によって得られる概念とアイデアの違いが強調されながら、標準直観は「あらゆる個々の現象の形式 (Formen)」(Go, 62)だとされる。つまり標準直観によって個々の表象を、個々の表象として認識可能になる。ここまで標準直観の私たちの認識に対する働きが示せた。アイデアの標準直観としての特徴について、『根拠律』の註で、以下のように述べられる。

アイデアは、[...] 形式的なものだけに有効であるにとどまらず、十全な表象の実質 (Materie) にも有効である標準直観として記述され得る (Go, 63)。

すなわちアイデアは普遍性と規定性を兼ね備えることで、私たちが経験において個々の表象を認識するための制約、つまり個々の事物をそれと対照させることでその認識が可能になるような原形としての機能を担っている¹²。これがアイデアの超越論的働きだ。

さて次に、アイデアと意志の関係を明らかにするために、超越論的働きを担うアイデアはいかにして可能かを考察する。そのためにはまずアイデアがファンタスマだということを示す必要がある。ではファンタスマとはなにか。ファンタスマとはかつて直接現在した表象が再現されたものであり、それは十全な表象でありつつ、経験の全体には属さない表象である (Vgl. Go, 27)。換言すると、ファンタスマは、かつて認識された表象が再現された表象である。それゆえファンタスマ自身は表象でありながら、時間空間の規定を受ける経験の全体には属さない。またファンタスマが十全な表象だという点に、概念との相違がある。というのも概念は表象の表象であり、個々の十全な表象から抽象された一般性を帯びた表象だからだ (Vgl. Go, 49)。更に概念とアイデアの相違については以下の点が指摘できる。概念は抽象的で、概念相互の境目は明確であるにもかかわらず、その内容は完全に未規定にとどまる。一方でアイデアは概念の代わりを十分果たすにもかかわらず、全く直観的で、完全に規定されている。従ってアイデアは直観把握の時間空間形式によって、複数のものに分かれているが単一なものだ。それに対して概念は理性の抽象によって、複数のものから復元された単一なものだ (Vgl. W1, 312f.)。

次にアイデアとファンタスマの同一性を示す。ショーペンハウアーは『根拠律』第 29 節「概念の代わりをするもの (Repräsentanten der Begriffe)」で、以下のような例を挙げて、概念とファンタスマの違いについて言及している。

例えばある犬のファンタスマを呼び起こすとする。その犬は、大きさ、形、色などのあらゆる規定を持った表象として存在しなければならない。一方で、その犬のファンタスマが代

¹² アイデアとファンタスマの同一性に関しては、遺稿集の以下の指摘からも明らかだ。「プラトンのアイデアは本来、理性の下にあるファンタスマである。それは理性が普遍性の捺印を押したファンタスマである」(HN1, 130f.)。

わりをしている概念には、そのよう規定が一切ない (Go, 52)。

私たちが日常、「犬」という生き物を思い浮かべようとするとき、それは犬一般を表す何かでありながら、何らかの具体的な規定を持った「犬」であるはずだ。それがファンタスマだ。この例からファンタスマが普遍性と規定性を持つことで、標準直観として超越論的に働くことが明らかになる。私たちは独自にこのような「犬」を思い浮かべることが可能である限りで、その「犬」と現前する犬を対照させることで、ある犬を犬として認識している¹³。従ってこの例から標準直観としての機能をもつアイデアがファンタスマだと読み取れる。しかし、この例に留まらず、ショーペンハウアーは明確に「アイデアは概念の代わりをするもの」(Go, 63)と述べている。従ってアイデア＝概念の代わりをするもの(標準直観)＝ファンタスマであり、アイデアがファンタスマに含まれることが指摘できる。

さてこれまでの議論で、アイデア＝標準直観＝ファンタスマであることが分かった。アイデアはファンタスマだ。従ってアイデアは、時間空間を越えた十全な表象であり、私たちの認識の制約としての機能を持っている。更にアイデアはかつて現在した直観から再現された現在する表象だから、直観的であり、その点で私たちの経験から断絶しているのではなく、むしろ経験なしには再現されない。それゆえ経験から抽出された概念とは異なる。更にこのファンタスマとアイデアの同一性から、意志とアイデアの関係も明らかになる。つまり意志によって、アイデアが可能になる、別言すると意志がアイデアの可能性の制約だと分かる。『根拠律』では意志の働きとして以下のように述べられる。

意志は認識主観にかつて現在したことのある表象を強制的に繰り返すことができるし、そもそもあれやこれやに注意を向けたり、一連の思想を呼び起こしたりすることも強制できる (Go, 80)。

この指摘から、意志には志向性と、再現の能力があることが指摘できる。更にこの再現の「能力を想像力 (Phantasie) あるいは構想力 (Einbildungskraft)」(Go, 27)とショーペンハウアーは呼んでいる。従って、意志の構想力によって再現されるのが、ファンタスマだ。それゆえアイデアの成立にも、意志の構想力が不可欠である。

以上のようにアイデアの超越論的働きと、アイデアの成立には意志の構想力が必要だと示せた。前節で確認した、意欲に関する記述並びに性格論と、本節で明らかにしたアイデアの超越論的働きを基に、次節では身体において私たちに直接知られる意志について整合的に読み解く。

¹³ 標準直観としての「犬」が認識に先行するのか、個々の直観としての犬が標準直観に先行するのかはやはり問題として残る。しかし本稿では、両者は相関的であり、いずれかがいずれかに時間的に先行するものではないとする。

4. 総体としての意欲としての意志

本節では、前節までで明確になった点を簡略に示し、その上で「私たちに直接知られる意志」について解釈する。その際、意志＝総体としての意欲＝意欲のアイデア＝叡智的性格という構図が明らかになる。

まず第一節では、私たちの認識の形式である根拠の原理に規定されない意志が、身体において直接与えられているという叙述の問題性を確認した。そして「私は私の意志をその個々の働きにおいてのみ認識する」ことと、意志の働きはすなわち身体の働き（行為）であることから行為と意欲の同一性について考察した。第二節では行為とは、決断という意志の作用によって願望が意欲、行為になることを確認した。更に決断の制約として、叡智的性格について言及し、その叡智的性格が行為から推論されると、経験的性格と呼び得ることを示した。また第三節では、叡智的性格とプラトンのアイデアの同一性との繋がりから、プラトンのアイデアの超越論的働きについて明らかにした。その際重要だったのは、意志の働きがプラトンのアイデアの可能性の制約として考えられたことだった。

ここまでの議論で以下のことが指摘できる。そもそも意志の働きは、行為と認識の二つの面に対してその制約として機能している。行為において、その制約は叡智的性格と呼ばれ、認識において、その制約はプラトンのアイデアと呼ばれる。そしてこの二つの働きはいずれも、行為と認識の制約である限りで超越論的働きである。

しかし以上の考察では、身体の働きにおいて直接与えられる意志が何かについて十分に説明できない。なぜなら個々の身体の働きから推察され得るのは、叡智的性格ならびにプラトンのアイデアの働きに過ぎず、ひいては意志の働きに過ぎないため、直接与えられる意志が何かについては積極的な叙述をできていない。従ってこの行為と認識の両面へ制約として働く意志が何なのかについて明らかにされなければならない。すなわち叡智的性格とプラトンのアイデアの消失点としての意志が何なのか、より正確に表現するなら、その意志はどのような表象として考え得るのが、示されなければならない。本節で「総体としての意欲」がその消失点として超越論的に要請されることを示し、本稿の結論とする。

既に確認したように、意志は根拠の原理が規定する領域に無いため、意志には「端的に根拠がない」。従って「実際あらゆる目標、あらゆる限界の不在は、意志そのものの本質に属する。そして意志は終わりのなき努力（das Streben）である」（W1, 229）。しかし私たちは、何らかの目的を持たずに個々の行為することはない。

あらゆる個々の行為は目的を持っている。しかし総体としての意欲（das gesammte Wollen）は決していかなる目的も持たない（W1, 230）。

意欲は行為であった。従って個々の意欲には一定の目的がある。すなわち何らかの希求する対象がある。また意志も終わりのなき努力、つまり何かに対する志向性を有する力として表現される。しかし総体としての意欲には目的はない。そして意志にも目的はない。意志も総体としての意欲

も、志向性を持つものでありながら、最終的な目標を持たない。なぜなら意志は根拠律に規定を受けないからであり、総体としての意欲はあらゆる意欲の集合であるため、その希求する対象は無限に拡散し定まらないため、一定の目標を持ち得ないからだ。それゆえ意志は総体としての意欲、あらゆる意欲を集めたものとして記述できる。

個々の行為、個々の意欲に直接与えられていると表現されている意志は、総体としての意欲と解せる。もちろん総体としての意欲は、私たちの認識の対象にはならない。しかし総体としての意欲は超越論的に私たちに与えられていると考えざるを得ない。詳述すると、私たちは個々の意欲を、個々の意欲として認識するが、しかし前節のアイデアの議論で見たように、そのためには、意欲とは何かを知っていなければならない、少なくとも分かっているはずだ。つまり意欲のアイデアを持っていなければ、意欲を意欲として認識できない。総体としての意欲とは、あらゆる意欲を集めたものだから、それは意欲のアイデアだ。というのもアイデアは標準直観として、個々の表象が例外なく有する何らかの規定性を持っていなければならないからだ。またアイデアは、個々の事物のあらゆる集合を代表するものだからだ。従って、総体としての意欲は、個々の行為において、個々の意欲を意欲として認識するために、意欲のアイデアとして超越論的に与えられている。

さてここまでで、総体としての意欲は意志であり、それは意欲のアイデアだと明らかにできた。次に総体としての意欲が行為の制約として機能していることを確認する。まず意欲と行為は同一の表象であり、その規定だけが異なる。従って行為が成り立つことは、行為を認識することと同義であり、つまり意欲を認識することと同義だ。更にプラトンのアイデアとは叡智的性格だから、総体としての意欲は叡智的性格だ。つまり、叡智的性格とは私たちの経験からは推しはかり得ない私たちの行為の傾向性、いわばあらゆる行為の傾向性であり、そして意欲と行為が同じ表象なのだから、叡智的性格は、あらゆる意欲の総体と一致していなければならない。従って意欲と行為が同一の表象である以上、総体としての意欲は、行為の制約でもなければならない。更に主著でも、『根拠律』でも、意欲の主体が意志と同定される箇所がある（Vgl. W1, 153., Go, 72ff.）。意欲の主体とは、意欲の担い手、つまり願望が意欲に変わる契機、決断による行為の起源だ。また私たちの行為に先立つ決断の制約である限りで、叡智的性格は私たちの行為の制約として機能している。それゆえ意欲の主体は、叡智的性格をその制約として持つ。つまり私たちの個々の行為において、数多の願望が意欲となり行為になるためには、任意の願望が決断されなければならない。その決断の制約が叡智的性格である。更に叡智的性格は、意欲の総体と一致する。従って個々の行為において、数多の願望が行為になるに際して、総体としての意欲は決断の制約として超越論的に要請される必要がある。そしてその働きは叡智的性格と呼ばれている。

ここまで、意志＝総体としての意欲＝意欲のアイデア＝叡智的性格が明らかになった。以上のことを踏まえて、ショーペンハウアーによって私たちの行為において直接与えられているとされる意志を、改めて総体としての意欲として解釈してみる。総体としての意欲とは、あらゆる意欲を総合したものだ。従ってそれは、認識不可能である。しかし個々の行為においては、個々の意欲の認識の制約として、個々の行為の決断の制約として、超越論的に総体としての意欲があらねばならない。換言すると、少なくとも個々の意欲が認識可能であり、個々の行為が成立している限

り、意欲のアイデアとしての、総体としての意欲は想定されなければならない。その意味で私たちは、個々の行為において、総体としての意欲を知っていると、すなわちそれは認識はされないが、直接与えられていると想定されることは可能である。

おわりに

本稿では世界が意志として叙述される際の出発点として、身体において「直接に知るものとして与えられて」いる意志とは何かを考察した。本来意志には私たちの認識の形式が当てはまらないため、私たちには如何様にも意志は認識できないはずである。しかしショーペンハウアー曰く、意志はその個々の働きにおいて認識される。この指摘を手掛かりに、意志の働きは行為であり、意欲であることと併せて、直接与えられる意志を意欲として議論を進めた。

次に意欲と行為の関係をショーペンハウアーの性格論と関連づけて記述した。数多の願望が決断によって意欲、行為になる。そしてこの決断の制約として、つまり意欲の主体として叡智の性格が記述された。しかし叡智の性格も意志と同様、私たちには知り得ず、行為から推論される限りで、経験的性格として私たちに知られる。

それからプラトンのアイデアの超越論的働きについて明らかにした。プラトンのアイデアは標準直観として、個々の事物を個々の事物として認識するために機能していた。そしてプラトンのアイデアの制約として意志が働いていた。以上の考察で、意志の働きが叡智の性格、プラトンのアイデアとして表れることが確認できた。

最後に「総体としての意欲」の超越論的働きを示し、私たちに直接知られる意志とは、意欲の総体であると結論付けた。総体としての意欲とは、あらゆる意欲を総合したものであり、その限りで超越論的働きを有することが指摘できた。つまり総体としての意欲とは、意欲のアイデアだ。更に超越論的性格とアイデアの同一性、意欲と行為の同一性から、総体としての意欲が叡智の性格として働くことも示した。その際やはり、あらゆる意欲の総体が意欲のアイデアだということが、その同一性を保証している。そして私たちに直接知られている意志とは、総体としての意欲であり、超越論的な条件として想定されなければならないことを明らかにした。つまり総体としての意欲は、個々の行為において現前するという仕方では私たちに認識されるのではなく、むしろ個々の行為が成り立つ地平、つまり意欲を認識する地平を可能にする制約として、超越論的に私たちに知られている。そのことを直接知られると表現し得ると示した。

本稿は意志を総体としての意欲だと解明したことで、ショーペンハウアーの認識論と性格論を関連させながら、表象一元論の立場から意志と表象の消失点を究明しようと試みた。また総体としての意欲として、従来よりも明確に意志の特徴づけを行うことができた。それは意志の超越論的働きを解明した先行研究に依拠しつつ、その超越論的機能の始原としての意志が何かを記述することに寄与すると考える。

註

ショーペンハウアーからの引用は、以下に記載の略号を用いる。

W1: Arthur Schopenhauer, *Die Welt als Wille und Vorstellung*, Deutscher Taschenbuch Verlag, 2011

Go: Arthur Schopenhauer, *Ueber die vierfache Wurzel des Satzes vom zureichenden Grunde.—Eine philosophische Abhandlung*, in: *Sämtliche Werke Bd. 7*, hrsg. v. A. Hübscher, F. A. Brockhaus, Wiesbaden, 1972

HN1: Arthur Schopenhauer, *Der handschriftliche Nachlaß*, Bd. 1, hrsg. v. A. Hübscher, Frankfurt a. M., 1966
(すえだけいか 哲学哲学史・博士後期課程)

参考文献

- ・ Kuno Fischer, *Geschichte der neuern Philosophie—Schopenhauers Leben, Werke und Lehre—*, Bd.9, KRAUS REPRINT, 1973
- ・ Matthias Koßler, „Die Philosophie Schopenhauers als Erfahrung des Charakters“, in: *Schopenhauer im Kontext. Deutsch-polnisches Schopenhauer-Symposion 2000*, hrsg. von Dieter Birnbacher u.a., Würzburg, 2002
- ・ YASUO KAMATA, *Der junge Schopenhauer—Genese des Grundgedankens der Welt als Wille und Vorstellung*, Alber, Freiburg/München, 1988
- ・ 太田匡洋「ショーペンハウアーにおける類比推論について—「実在性」はいかにして可能か—」
京都大学哲学論叢刊行会編『哲学論叢』40号、2013年
- ・ 鎌田康男「構想力としての世界——カント『純粹理性批判』演繹論の受容から見る初期のショーペンハウアー哲学の再構築——」『理想』第687号、2011年
- ・ 鎌田康男、齋藤智志、高橋陽一郎、臼木悦生『ショーペンハウアー哲学の再構築』法政大学出版局、2000年
- ・ 鎌田康男「若きショーペンハウアーにおける「表象としての世界」の構想——ショーペンハウアー研究の新視角を求めて（第一部）——」、『武蔵大学人文学会雑誌』、第19巻、第3・4号、1988年
- ・ 鎌田康男「若きショーペンハウアーにおける「意志としての世界」の構想——ショーペンハウアー研究の新視角を求めて（第二部）——」、『武蔵大学人文学会雑誌』、第20巻、第3・4号、1989年
- ・ 齋藤智志、高橋陽一郎、板橋勇仁編『ショーペンハウアー読本』法政大学出版局、2007年
- ・ 竹内綱史「世界は私の表象なのか？——ショーペンハウアーとニーチェ、あるいは、表象と解釈——」ショーペンハウアー協会編『ショーペンハウアー研究』第16号、2011年
- ・ 堤田泰成「意志否定の条件としての〈思慮〉について——性格・自己認識・自由——」日本ショーペンハウアー協会編『ショーペンハウアー研究』第22号、2017年
- ・ 西山友子「ショーペンハウアーにおける身体把握の二重性と「意志」の概念」上智哲学誌編集委員会編『上智哲学誌』、第23号、2011年

Über den Ursprung der Aktivität zur Welt—Wollen als Fluchtpunkt zwischen Wille und Vorstellung—

Keika SUEDA

Schopenhauer stellt in seinem Hauptwerk, „*Die Welt als Wille und Vorstellung*“ dar, dass die Welt Vorstellung und gleichzeitig Wille ist. Seine Darstellung wurde bisher in der Geschichte der Philosophie verworfen. Weil man ‚den Willen‘ für die Substanz hält, der als Ding an sich charakterisiert wird, und sein philosophisches System als einen Dualismus begreift. Der Vorwurf ist darin begründet, dass der Wille als Substanz ursprünglich existiert, aus dem die Vorstellung hervorgeht. Aber in den letzten Jahren ist es möglich geworden, den Willen als transzendente Bedingung zu betrachten, und seine Philosophie konsequent zu verstehen. Daher folge ich auch einer solchen Interpretation, wie etwa der von Yasuo Kamata. In seiner Beschreibung analysiert Schopenhauer den Leib und findet in ihm zwei Seiten, nämlich Wille sowie Vorstellung, dann überträgt er die Dualität des Leibes auf alle Seiende (Tiere, Pflanzen, Anorganisches etc.). Es ist jedoch problematisch, dass man unmittelbar im Leib solche zwei Seiten erkennt. Also, stelle ich in dieser Arbeit fest, was der im Leib unmittelbar erkannte Wille ist.

Im Folgenden zeige ich zuerst, wo es Probleme in seiner Darstellung gibt, um welche Probleme es sich handelt, und wie Schopenhauer den Begriff ‚Willen‘ beschreibt. Ausgehend vom seinem Hauptwerk und seiner Dissertation ‚*Ueber die vierfache Wurzel des Satzes vom zureichenden Grunde*‘ stelle ich Inhalte des Begriff ‚Wollen‘ und Schopenhauers Lehre des Charakter dar. Ein genaues Verständnis ist unerlässlich, und er erläutert diesen Begriff in der Beziehung mit seiner Lehre von Charakter. Weiter führe ich aus, dass ‚die Platonische Ideen‘, die Bedingung unser Erkenntnis und unseres Handelns sind. Nach neuesten Forschungen, haben sie auch transzendente Funktionen. Schließlich identifiziere ich denjenigen Willen, den man unmittelbar im Leib erkennt, mit ‚dem gesamten Wollen‘, und zugleich mit dem ‚intelligiblen Charakter‘. Indem ich den Willen auf transzendentaler Ebene untersuche, kann er präziser verstanden und außerdem mit seiner Lehre vom Charakter in Beziehung gesetzt werden.

「キーワード」

意欲、叡智の性格、イデア、意志、表象